

## 選択と行為

—ハイデガーのアリストテレス解釈—

河田 真由子 (東北大学)

### *Proairesis and Praxis*

— Heidegger's Interpretation of Aristotle

Mayuko Kawata

Heidegger is said to have interpreted Aristotle's *Nicomachean Ethics* ontologically in *Being and Time* (*Sein und Zeit*). Although interpretations often center on book 6, consideration of the other books makes possible a more comprehensive reading of Heidegger's *Being and Time*. It should be noted that in Aristotle's theory of action a character (*ethos*) is based on a state (*hexis*), and he indicates the changeability of the character by the agent's regret. Heidegger translates Aristotle's terminology *proairesis* as being-resolved, although it typically is used to refer to choice. Practical wisdom (*phronēsis*) is also Aristotle's terminology which refers to unconcealment (*alētheia*) and Heidegger interprets it as resoluteness (*Entschlossenheit*). Resoluteness is the eminent mode of disclosure (*Erschlossenheit*, which functions as unconcealment) to sight for action (*praxis*). Irresoluteness (*Unentschlossenheit*) contrasts with Aristotle's lack of self-control. Agents who are lack of self-control have time to regret their actions, while irresolute *Dasein* "has no time" (*Sein und Zeit* 410). Heidegger develops his notion of temporality based on Aristotle's theory of time and regards Aristotle's time itself as ordinary time, except for time for practical wisdom. Although resoluteness and irresoluteness are formally contrary terms, they both reveal human existence by interpreting the underlying Aristotelian notions.

**keywords:** *Entschlossenheit, phronēsis, proairesis, Unentschlossenheit, lack of self-control*

キーワード：決意性、思慮、プロアイレシス、非決意性、自制心の無さ

## はじめに

1921/22年冬学期講義『アリストテレスの現象学的解釈』の後、ハイデガーのアリストテレス研究は1924年頃に『存在と時間』(以下「SZ」と表記)のプロジェクトに取って代わったが、ハイデガーはアリストテレスの読みの本質的な洞察を放棄したことはなく、SZそして後の作品において生かしているという<sup>1</sup>。とりわけ『ニコマコス倫理学』(以下「EN」と表記)第6巻の思慮(phronēsis)解釈は初期ハイデガーの現存在分析に決定的な影響を与えたと考えられており<sup>2</sup>、その検討は重要なテーマの一つである<sup>3</sup>。この事情をもとに、本稿はアリストテレス行為論をハイデガーの思想の中により深く見出すことを試みる。そのためにハイデガーの「決意性(Entschlossenheit)」とその対概念である「非決意性(Unentschlossenheit)」の現象<sup>4</sup>に焦点を当て、アリストテレス行為論との連関を整理する。まず、第1節においてアリストテレス行為論の概略をまとめ、第2節において思慮およびプロアイレシス(proairesis)についてのハイデガーの解釈を決意性に見出し、第3節において決意性の対概念である非決意性をENの性格分類の一つである自制心の無さ(akrasia)と比較して検討する。

## 1 アリストテレス行為論の概略

アリストテレスはEN第2巻において性格について論じた後、第3巻において行為の自発性・非自発性の区分を行い、第6巻において知のあり方の区別と行為に関わる知である思慮の内容を明らかにし、第7巻においてアリストテレスの行為の説明から外れてしまう自制心の無さの存在を論証する。筆者は、これらの巻の議論がアリストテレス行為論の要であると考えており、本節においてその概略を説明する。

アリストテレス行為論は行為(praxis)と性格(ēthos)の緊密な関係性を基礎とする。EN第2巻において、性格の徳とその状態(hexis)の形成について論じられる。性格の状態は、

<sup>1</sup> Kisiel, T. 1993. *The Genesis of Heidegger's Being and Time*, Berkeley: University of California Press, 311-314. / Backman, J. 2005. "Divine and mortal motivation: On the movement of life in Aristotle and Heidegger." in *Continental Philosophy Review*, 38, 241-261. SZは未完の著作であるが、全体の構想を述べた部分(SZ 39-40)によると、第2部「テンポラリテートの問題組織を手引きとして存在論の歴史を現象学的に解体することの綱要」の第1編でカント、第2編でデカルトについて論じた後、「第3編 アリストテレスの時間論は古代存在論の現象的基盤と限界を判定する基準である」と、アリストテレスを論じることをハイデガーは予定していた。

<sup>2</sup> Volpiの論文“*Being and time: a "translation" of the Nicomachean ethics?*”は、まさにハイデガーのEN解釈の事情を記述している。また、斎藤は『存在の解釈学』において「初期以来の思想を受け継ぐ既刊部分の『存在と時間』の現存在の解釈学が、ほぼフロネーシスを中心に構成されているのは間違いない」(175頁)と指摘する。Cf. Volpi, F. 1994. “*Being and time: a "translation" of the Nicomachean ethics?*” trans. J. Protevi, in *Reading Heidegger From the Start: Essays in His Early Thought*, T. Kisiel and J. Buren. ed. Albany: State University of New York Press, 195-212. / 齋藤元紀. 2012. 『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局。

<sup>3</sup> ハイデガーの思慮解釈の事情はColtmanに詳しい。Cf. Coltman, R. 1998. *The Language of Hermeneutics*. Albany: State University of New York Press, 12-17.

<sup>4</sup> SZ 298f.

徳（正義や節制）や悪徳（放埒やだらしの無さ）、自制心の無さなどのことをいう。性格の状態は、その性格に関わる行為の反復によって形成される<sup>5</sup>。第3巻では、自発的な行為のうちプロアイレシス<sup>6</sup>による行為が重点的に検討される。プロアイレシスは、邦訳ではギリシア語の原義どおり「選択」<sup>7</sup>と訳され、英訳には邦訳と同じく“choice（選択）”<sup>8</sup>や文脈をふまえた“decision（決定）”<sup>9</sup>がある。行為者は、行為の目的（telos）である願望（boulēsis）を実現するために、「思案することから判定して、その思案に基づいて欲求する（oregometha kata tēn boulesin）」<sup>10</sup>のであり、プロアイレシスは「思案に基づく欲求（orexis bouleutikē）」<sup>11</sup>と定義され、行為の始点となる。次に、第6巻では思慮と他の知との区分が考察される。アリストテレスは知のあり方を思慮、技術、智慧、知性、論証的知識の5つに分け、それら5つの知の機能はいずれも「真理（alēteia）」<sup>12</sup>であるという。そのうち思慮（phronēsis）は、人間にとって善悪に関わる行為を行うための「正しい理り（orthos logos）」<sup>13</sup>である。「何らかの立派な目的のためによく推論」<sup>14</sup>し、「（よく生きることを）全体にわたって思案する人こそ、思慮ある人であろう」<sup>15</sup>という。つまり、いかなる状況においても善き思案を行うことのできる人が思慮ある人である。そして、第7巻において自制心の無い人（akratēs）が取り上げられる。自制心の無さとは、ある行為を低劣と知っていてしてはならないと思っているが、欲望のゆえにその行為を行ってしまう不安定な性格であり、アリストテレスの典型的な性格モデルに当てはまらないがゆえに、他の性格の説明が一通り終わった後に検討される。

次節よりハイデガーのアリストテレス解釈を検討するとともに、これらのアリストテレス行為論からもまたハイデガーに何が見出せるかを考察する。

## 2 決意性と思慮ある人のプロアイレシス

本節では、ハイデガーの思慮およびプロアイレシス解釈とSZの決意性がどの観点から

<sup>5</sup> EN 1103a17-18, 1103b22-24, 1114a7, 9-10.

<sup>6</sup> 本文において後述するように、古典ギリシア語の proairesis は通常「選択」と訳されるが、ハイデガーはアリストテレスの含意をふまえて“Entschlossenheit（決意すること）”と訳している。同一の語に関して複数の訳語を利用することによる紛らわしさを避けるために、本稿では「プロアイレシス」と表記する。

<sup>7</sup> 加藤訳（70頁）、朴訳（99頁）、神崎訳（103頁）、渡辺訳（上巻, 172頁）。

<sup>8</sup> Ross, D., 1995. *Aristotle*. 6th ed., London: Routledge, 208.

<sup>9</sup> Broadie, S. and Rowe, C. 2002. *Aristotle, Nicomachean ethics: translation, introduction and commentary*. Oxford: Oxford University Press, 126. / *Aristotle, Nicomachean Ethics*. T. Irwin trans., 2nd ed., Indianapolis: Hackett Publishing, 2000, 33.

<sup>10</sup> EN 1113a11-12. 本稿におけるENの訳は、諸訳を参考にしうえて筆者の訳を用いた。SZは細谷訳を中心に諸訳を参考にし用いたが、訳語や表現は適宜変更している。ハイデガーの講義録については、邦訳を用いたものについては文献表に記し、記していない場合は筆者の訳を用いている。また、古典ギリシア語に関しては、統一性の観点からすべてローマ字表記に直した。ハイデガーが原文で斜字にしている箇所は、引用の際すべてブロック体に直した。

<sup>11</sup> EN 1139a23.

<sup>12</sup> EN 1139b12.

<sup>13</sup> EN 1144b27.

<sup>14</sup> EN 1140a29-30.

<sup>15</sup> EN 1140a30-31.

結び付くかを検討する。ハイデガーの思慮解釈の SZ への影響を見る研究において、様々な説がある中で<sup>16</sup>、筆者は「現存在の開示態の際立った様態」<sup>17</sup>であり「良心現象から剔出された」<sup>18</sup>決意性が SZ における思慮の解釈された語としてふさわしいと考え、以下で検証する。ただし、より正確には実践的三段論法（後述）の構図をふまえ、思慮ある人のプロアイレシスが決意性であると提案する<sup>19</sup>。

ハイデガーはプロアイレシスを「決意していること (Entschlossenheit)」<sup>20</sup>と訳す。プロアイレシスは邦訳や英訳で「選択」あるいは「決定」と訳されるとすでに述べたように、ドイツ語においても“Willenswahl (選択意志) ”、“Vorsatz (意図) ”、“Entscheidung (決定) ”などと訳されており<sup>21</sup>、ハイデガーの訳語も特段変わったものではない。むしろ、「選択」ではない訳語を採っている点に注意を向けたい。なぜならプロアイレシスは、通常理解される、複数の選択肢から一つを選ぶという意味での選択ではないからである。アリストテレスのプロアイレシスは、「目的に向かうもの (tōn pros ta telos)」<sup>22</sup>、すなわち目的を達成するための手段や手立てに関わる。それらの思案の結論がプロアイレシスであり、行為者が直面する状況におけるただ一つの選択、つまり決定を意味する。したがって、ハイデガーの「決意していること」という訳語は、アリストテレスのプロアイレシス理解に準ずるものといえる。

アリストテレスにおいて EN 第 3 巻の思案の過程とプロアイレシスは EN 第 6 巻で実践的三段論法において捉えなおされ、ハイデガーもその点について考察している<sup>23</sup>。実践的三段論法とは、大前提（普遍命題）・小前提（個別命題）・結論からなり、結論が出れば妨害がない限り必ず行為するという、アリストテレスによる行為の原理を説明する方法である。この実践的三段論法の構図において、大前提は願望、結論はプロアイレシス、思案は大前提から結論にいたるまでの推論の過程を指す<sup>24</sup>。ハイデガーは、思慮は思案を正しく

<sup>16</sup> Caputo は“Verstehen (理解) ”、Bernasconi は“Umsicht (配視) ”、Taminiaux、細川は“Entschlossenheit (決意性) ”が思慮を解釈したものであると提案する。Cf. Caputo, J. D. 1987. *Radical Hermeneutics: Repetition, Deconstruction, and the Hermeneutic Project*. Bloomington: Indiana University Press, 110. /Bernasconi, R. 1989. “Heidegger's destruction of phronesis.” in *Southern Journal of Philosophy* 28, Supplement, 127-47. うち、Umsicht 解釈を示しているのは 130, 132, 138, 142. /Taminiaux, J., Gendreau, M. trans. & ed. 1991. *Heidegger and the Project of Fundamental Ontology*. Albany: State University of New York Press, 130. /細川亮一. 2000. 『ハイデガー哲学の射程』創文社, 180-183 頁。

<sup>17</sup> SZ 297.

<sup>18</sup> 細川前掲書 183 頁。ハイデガーは GA19 において思慮を「良心」(GA19: 56) と訳している。

<sup>19</sup> Volpi も“In Whose Name? Heidegger and ‘Practical Philosophy’”において、Entschlossenheit が proairesis の“ontologization” (40) を表していることを指摘している。Cf. Volpi, F. 2007. “In Whose Name? Heidegger and ‘Practical Philosophy.’” *European Journal of Political Theory*, 6(1), 31-51.

<sup>20</sup> GA18: 141.

<sup>21</sup> proairesis の訳語とその出典は次のとおりである。

Vorsätzlichkeit (意図性) : Lasson, A. 1909. *Aristoteles Nikomachische Ethik*, Jena: E. Diederichs, 47-48.

Willenswahl (選択意志) : Rolfes, E. 1911. *Nikomachische Ethik*, Leipzig: Meiner, 49.

Vorsatz (意図) : Gohlke, P. 1956. *Nikomachische Ethik*, Paderborn: F. Schöningh, 69.

Entscheidung (決定) : Dirlmeier, F. 1956. *Nikomachische Ethik*, Berlin: Akademie Verlag, 48. /Gigon, O. 1991. *Nikomachische Ethik*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 154.

<sup>22</sup> EN 1111b27.

<sup>23</sup> GA19: 157-165, GA62: 406-412.

<sup>24</sup> 横地はハイデガーの「実践的推論」解釈に主眼を置いて論じ、思慮の機能である“Sehen (見ること)”の分析を通して、「小前提における〈見る〉は(中略)『目配り』であり、実践的ヌース

するが自立的なもの (ein Eigenständiges) ではないと指摘し<sup>25</sup>、「思慮は proairesis において起こる」<sup>26</sup>と論じる。すなわち、結論かつ行為の始点であるプロアイレシスに自立性があり、思慮はプロアイレシスによって初めてそのはたらきを表す。そして、ハイデガーは思慮を「alētheuein という hexis (真理を明らかにすることという状態)」<sup>27</sup>と解釈し、そのはたらきは「その中で私が私自身の透察性 (Durchsichtigkeit) を意のままにできる」<sup>28</sup>ものであるとする。思慮は思案、すなわち行為の「始点 (archē)」と「目的 (telos)」によってあらかじめ指し示されているその間を「善き (eu)」もの、すなわち「正しさ (orthotēs)」のあるものにする<sup>29</sup>。この思案の正しさが「正しい決意性 (rechte Entschlossenheit)」<sup>30</sup>を可能にするとハイデガーは指摘する。つまり、思慮自体は自立的なものではなく、正しい理りによって思案の正しさを支えるのであり、プロアイレシスによってその正しさがあらわれる<sup>31</sup>。このように、思慮ある人はつねに真理を見極めることができる。

この思慮のはたらきである真理の観点から、ハイデガーは決意性を構築する。SZ においては第 44 節で真理が論じられる。ハイデガーは古代ギリシアの真理論研究をふまえて、真理の意味を「存在者を隠れたさまから引き出してきて、その隠れなきありさまにおいて見させる」<sup>32</sup>こと、すなわち「発見的」<sup>33</sup>なはたらきに見る。そして、そのはたらきにおいて現存在の本来の開示態 (Erschlossenheit) を捉える<sup>34</sup>。そして、現存在の開示態の際立った様態である決意性において、「現存在の本来の真理であるがゆえに最も根源的な真理が獲得され」<sup>35</sup>る。この真理の獲得は「存在解釈の理解的=解釈的手続きの方法的透明さ」<sup>36</sup>を確保し、決意性こそが初めて現存在に「本来の透察性 (Durchsichtigkeit) を与える」

---

という一種の感覚による状況開示がふくまれる」(195 頁)と指摘する。つまり、知覚には知性(ヌース)がはたらいており、ハイデガーによって瞬視と名指され SZ に引き継がれる。Cf. 横地徳広. 2018.「ハイデガー『ソピステス』講義における「実践的推論」と「知慮」の解釈について」,『現象学年報』34, 193-200 頁.

<sup>25</sup> GA19: 149.

<sup>26</sup> GA19: 159.

<sup>27</sup> GA19: 52. アリストテレスは、思慮は人間にとって善悪に関わる行為を行う理りであり魂の「真なる状態 (hexis alētēs)」(EN 1140b4) であるという。

<sup>28</sup> GA19: 52.

<sup>29</sup> GA19: 149-150.

<sup>30</sup> GA19: 149.

<sup>31</sup> ハイデガーはナトルブ報告において、EN 第 6 巻解釈の狙いを「特殊な倫理的問題構制はひとまず度外視」(GA62: 376, 邦訳 57 頁)して、「真正な存在真実化を遂行する可能性をよく駆使しうるうえでのさまざまな様態」(ebd.)を明らかにすることであると述べている。そして、「智慧(注視する本来的理解)と思慮(顧慮する目配り)とは、直知(筆者注: 筆者が知性[ヌース]と訳す語)すなわち純粋な直覚 (Vernehmen) そのものの遂行様態として解釈される」(ebd.)という。本稿で扱う余裕はないが、ハイデガーにおける智慧と思慮の関係は当然考えられるべきであり、そのテーマにおける論考もすでに存在する。Cf. 齋藤前掲書 174-185 頁, 森一郎. 2018.『ハイデガーと哲学の可能性 世界・時間・政治』法政大学出版会, 221-227 頁.

<sup>32</sup> SZ 219.

<sup>33</sup> SZ 220.

<sup>34</sup> SZ 221. 開示態は「根源的真理」として捉えられたのであり、その中でも現存在が存在可能として存在しうる最も根源的で最も本来の開示態は「実存の真理 (Wahrheit der Existenz)」(ebd.)であるという。

<sup>35</sup> ebd.

<sup>36</sup> SZ 230.

37という。このことから決意性を、真理を捉えること、すなわち一種の真理現象 (Wahrheitsphänomen)<sup>38</sup>と理解することができる。さらに、ハイデガーは「自立性は実存論的には、ほかでもなく先駆的決意性を意味する」<sup>39</sup>と論じ、決意性は真理を捉えるはたらきが中心的ではあるものの、「決意していること」という自立性を欠いては成立しえないことがわかる。このことから、思慮ある人のプロアイレシスの解釈として見た場合、決意性は、真理を捉えるための現存在の様態の説明と理解することができる<sup>40</sup>。

以上より、アリストテレスの「思慮ある人のプロアイレシス」は、ハイデガーにおいて、真理を明らかにする (alētheuein) という真理論の観点で「決意性」と解釈しうる。

### 3 非決意性と自制心の無さ

本節では、前節の思慮を伴うプロアイレシスの解釈が決意性であるという結論を手がかりに、非決意性 (Unentschlossenheit) にハイデガーのアリストテレス EN 解釈が関連する可能性を検討し、その考察を通して非決意性とは何かを結論づけたい。非決意性は、決意性 (Entschlossenheit) に「非 (Un-)」を伴う形に見てとれるように、決意性の対概念<sup>41</sup>であるとともに形式的な語である。明確に定義がなされる決意性に比べて、非決意性が何を指すのかは曖昧である。しかし、ハイデガーの形式的告示 (formale Anzeige) の方法からすると、非決意性という空虚に見える語にこそ「積極的な意味で指示が与えられている」<sup>42</sup>と考えるのであり、その点で注目に値する。

まずハイデガー自身による非決意性に関する数少ない言及から始めよう。「非決意の人」<sup>43</sup>すなわち SZ 第 2 部の非決意性における現存在は、SZ 第 1 部で描かれる頹落的傾向にあ

<sup>37</sup> SZ 299.

<sup>38</sup> SZ 213.

<sup>39</sup> SZ 322.

<sup>40</sup> ただし、ハイデガーの思慮解釈は、真理を強力に突き詰めながら、EN の過剰な読み込みを含んでいる。たとえば GA18 において性格の徳の条件を思慮の条件と読み替えて解釈したり、また、徳から悪徳まで、自制心の無さを除きすべての性格に関わってくるプロアイレシスを「決意」と見なしたりしている。Taminiaux は、決意性はその本質において「実存論的『独我論』」(SZ 188) とハイデガーが呼ぶところのものに関連し、過激化した思慮 (the radicalized phronesis) は他者との関係性すなわち複数人での議論を気遣いの領域、すなわち現存在の非本来的なふるまいの領域に押しやると指摘する (Taminiaux 前掲書, 130)。

<sup>41</sup> ハイデガーは「実存論的に理解された決意性の反対概念」(SZ 299) と表現する。

<sup>42</sup> 形式的告示は SZ の最終的な理解のために不可欠だとハイデガーはいい (cf. Papenfuss and Pöggeler, 36-37)、「『形式的に告示されている』とは、(中略)そこで語られていることが『形式的な』ものという性格を持つという仕方、非本来的に告示されることであって、だがまさにこの『非』というもののうちに同時に、積極的な意味で指示が与えられているのである。内実の空虚なものが、自らの意味構造において、遂行の方向を与えるものでもあるわけである」(GA61: 33, 邦訳 35 頁。傍点は省略)と定義する。齋藤は『存在の解釈学』において、SZ における形式的告示の構造を、「現存在に先行する非本来性こそが、本来性へ向けて解釈学的循環を開始させるということの意味している」(齋藤前掲書, 52 頁)という「非本来性の反復」(ebd.)に見る。Cf. Papenfuss, D. and Pöggeler, O. eds. 1990. *Im Gespräch der Zeit*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.

<sup>43</sup> SZ 384, 410.

る世間 (das Man) を指すという<sup>44</sup>。第1部で展開される世間論では、世間がいたるところではたらきをなし、世間の公開性の構成である「疎隔性、平均性、均等化」<sup>45</sup>が、「世間と現存在についてのあらゆる解釈をさしあたって統制し、すべての点でその言い分を通」<sup>46</sup>し、現存在はそれに追従するのみである。そして、「だれひとりそれに対して責任を取る必要がない」<sup>47</sup>のである。そのような日常的な現存在は、根拠無しに広がり権威を持つ「世間話 (Gerede)」<sup>48</sup>、落ち着きがなく気晴らしにしかならない「好奇心」<sup>49</sup>、何かが起こっているようで何も起こっていない「曖昧さ」<sup>50</sup>の中で流される。これは現存在のうちに、頽落へ巻き込む機構がはたらいているがゆえである。つまり現存在は、絶え間なく非本来性に現存在を居続けさせるような無限の時間の中での頽落の動向<sup>51</sup>という「強力な機構」<sup>52</sup>をおのれ自身のうちに持っている。SZ 第1部において、非決意の現存在はこのように描かれる。そして、SZ 第2部では、非本来的な時間性の議論の派生として、日常的時間観念において、つねに配慮するものごとに追われ「時間が無い」<sup>53</sup>人が描かれる。日常的な現存在は、事実的に実存しながら、「はなはだしく奔走させられ」<sup>54</sup>で、「自分の配慮するものに自分を見失」<sup>55</sup>い「おのれの時間を奪われ」<sup>56</sup>ている。

このような非決意の人の様態は、本質的には何を意味するのか。そして、ハイデガーは非決意性を「実存論的に理解された決意性の反対概念」<sup>57</sup>と表現するが、非決意性は決意性とどのような点で反対といえるのか。以下では、決意性・非決意性をあわせた SZ の全体構造にも EN 解釈が関与する可能性を指摘することによって、非決意性に EN からの影響を読み込むことが可能であることを指摘する。まず、SZにおける根本現象は気遣い (Sorge)

<sup>44</sup> SZ 272-278. ハイデガーは「この非決意性という名称が表現しているのは、世間の支配的な既成解釈に帰服している存在として、私たちが解釈した現象に他ならない」 (SZ 299) と、SZ 第一編の世間論を指している。

<sup>45</sup> SZ 127.

<sup>46</sup> ebd.

<sup>47</sup> ebd.

<sup>48</sup> SZ 167-170.

<sup>49</sup> SZ 170-173.

<sup>50</sup> SZ 173-175.

<sup>51</sup> 非決意の現存在は「誘惑的」、「鎮静的」、「疎外的」と特徴づけられる (SZ 177f.)。すなわち、現存在はおのれ自身による頽落への絶えざる誘惑と、世間での生活が充実しているという非本来的な鎮静すなわち気休めを持っており、この誘惑と気休めは、すべてを理解しているそぶりを見せつつ結局何を理解するのかわからないという疎外を駆り立てる (ebd.)。さらに、この疎外は自己の本来性と可能性とを閉鎖してしまい、現存在を非本来性へと追い込み、「惑溺」の道へと通じさせる (SZ 178)。この惑溺の道への「転落」 (ebd.) が現存在を世間へと引きずりこむ (ebd.)。この頽落の動向は、「渦流」 (ebd.) として性格づけられる。

<sup>52</sup> 信太は『死すべきものの自由』において、「日常性という時間性=歴史性の本質は、自己投企が『日-常 (すべての一日) All-tag』という『無限時間』を構成している働きのうちにある」 (134 頁)。すなわち、日常性においては「人間の自己投企を欺きながら (自己欺瞞的に自己投企を構成しながら)、その生を『無限性=終端を持たないこと』=『不死性』の『安定存立性』へと構成していく強力な機構が支配している」 (136 頁) と、頽落的傾向にひそむ体制化を分析する。Cf. 信太光郎. 2011. 『死すべきものの自由 ——ハイデガーの生命の思考』東北大学出版会。

<sup>53</sup> SZ 410.

<sup>54</sup> SZ 384.

<sup>55</sup> SZ 410.

<sup>56</sup> ebd.

<sup>57</sup> SZ 299.

であり<sup>58</sup>、気遣いは「現存在の存在全般を規定」<sup>59</sup>して「根源的な構造の全体性」<sup>60</sup>をなす。筆者はこれに関して SZ の気遣い (Sorge) がオレクシス (orexis, 欲求) 解釈であるとする細川・坂下の解釈<sup>61</sup>を採り、SZ の気遣いをハイデガーによるアリストテレスのオレクシス解釈とみなす。とりわけ強調したいのは、気遣いは EN のオレクシス解釈であり<sup>62</sup>、ハイデガーが EN 解釈に定位して SZ を構成しているという点である<sup>63</sup>。このことより、決意性・非決意性をあわせた全体の枠組みの中で、非決意性に EN の影響を見る試みがより有効となる。

さて、筆者は非決意の人にアリストテレスの自制心の無い人の影響を見ることを試みる。自制心の無い人には、思案の曖昧さや自身の判断に踏みとどまれない点において、SZ における“Unentschlossenheit”の高田訳が表すような「優柔不断」<sup>64</sup>さがあり、非決意の人との共通点が見られるからである。また、アリストテレスにおける非決意の人とは、「決意しない」すなわちプロアイレシスしないで行為している人、つまり実践的三段論法を（少なくとも正常に）経ないで行為する人を指す。そして、アリストテレスの性格分類から見ると、つねにそうであるといえる性格は、自制心の無さのみであるからである<sup>65</sup>。アリストテレスにとって自制心の無さは特別な位置を占めており、人間の性格の可変性を担保し、善き人となるための探究に欠かせない<sup>66</sup>。自制心の無い人は、たとえば「甘いものを食べすぎてはいけない」と、してはいけないことを知っているにも関わらず、その行為を行ってしまう。アリストテレスに限らず古代ギリシアにおいて問題とされたのは、その際行為者が持つ知識は真の知識といえるのかということであった。ソクラテスは、もし行為者がしてはなら

<sup>58</sup> SZ 196, 221.

<sup>59</sup> SZ 121.

<sup>60</sup> SZ 193.

<sup>61</sup> Cf. 細川前掲書 90-91 頁. Cf. 坂下浩司. 2008. 「なぜ若きハイデガーは『動物運動論』を「広範な基盤」として『魂について』と『ニコマコス倫理学』を解釈する計画を『ナトルプ報告』で立てたのか——〈引用研究〉と〈参照箇所研究〉によるハイデガーの断片的テキストへのアプローチ」電子ジャーナル *Heidegger-Forum* vol.2, 90-113 頁, 109 頁.

<sup>62</sup> ハイデガーは EN のオレクシスに度々言及して、気遣いがその解釈であることも示唆している (GA18: 145f., GA62: 404, 406, 408-410, 413)。また、オレクシスの解釈に気遣い (Sorge) が用いられる (GA62: 408)。

<sup>63</sup> 細川はハイデガーがナトルプ報告において「事実的な生の動性 (faktische Lebensbewegtheit) の根本意味は気遣うこと (curare) である」 (GA62: 352, 邦訳 20 頁) と述べることを重視して、ハイデガーが『魂について』に定位して SZ を構成しているとする (細川前掲書 90 頁)。

<sup>64</sup> 高田訳 446 頁。

<sup>65</sup> 獣性という人間ならざる性格を除く。また、プロアイレシスをここまで善き行為のためだけのもののように描いてきたが、そうではない。アリストテレスは「一方 (筆者注: 放埒な人たちの方) はプロアイレシスするが、他方 (筆者注: 自制心の無い人たち) はプロアイレシスしない」 (EN 1148a16-17) とし、悪徳を持つ人もプロアイレシスすると述べる。悪徳の人も、自身にとって善く見えるもののために推論を行うのである。

<sup>66</sup> ハイデガーはアリストテレス行為論の要を理解していたからこそ、プロアイレシスを決意性の要件として過剰なまでに重視して解釈したのだと筆者は考える。Burnyeat は、EN 第 7 巻第 10 章における、自然的に備わった性格よりも習慣づけによって備わった性格の方が変えることが容易であるという議論をふまえて (EN 1152a27-31)、「時間的視角を仮定した場合、真の問題は次のことである。すなわち、いかにして私たちは、自らの属する種の本性がめざす目的としての完全に成熟した理性的動物へと成長するのか」 (Burnyeat: 85-86) と、時間に基づいた議論を展開する。Cf. Burnyeat, M. F. 1980. "Aristotle on learning to be good." In A. O. Rorty ed., *Essays on Aristotle's Ethics*. Berkeley: University of California Press, 69-92.



ないと知っていれば、その行為を行うはずはないと主張し、自制心の無さは存在しないとみなした<sup>67</sup>。それに対して、アリストテレスは、ある種の知のあり方を認めることで、自制心の無さという性格が存在することを論証しようとした<sup>68</sup>。この論争が示すのは、自制心の無さの問題は一種の真理論であり、曖昧な知が分析の対象となっているということである。そこでは、何をもちて本当に知っているといえるのかが問われている。

一方、ハイデガーは実存の真理を問題とし、非決意の人がいかに真理を掴みとれずに存在しているか、その様態を SZ において描いている。つまり、ハイデガーの真理論の観点から、非決意の人は真理の「被暴露性」<sup>69</sup>の反対で「隠蔽されている」<sup>70</sup>状態にあるといえる。ただし、真理を問題にするという点において、自制心の無い人と非決意の人は一致する一方で、ハイデガーがアリストテレスと大きく異なる点として時間観念がある。非決意の人の時間の無さについては述べたが、反対にアリストテレスの自制心の無い人には時間がある。すなわち、ハイデガーはアリストテレスに時間性を見出したものの、それはある意味過剰な解釈であり<sup>71</sup>、両者の時間観念は根本的に異なる。そして、その差異は非本来性においても明白である。つまり、自制心の無い人には曖昧な知を反省し改善する機会、すなわち後悔の時間がある<sup>72</sup>。後悔の時間は行為という運動を「後へ注視して」<sup>73</sup>数えられた時間であり、行為と地続きのものである。一方、ハイデガーの日常的な現存在は非本来的な時間性において在り、「忘却的＝現持的予期」<sup>74</sup>としての「独特の脱自的統一態」<sup>75</sup>において時熟する。したがって、非決意の人はつねに時間を失い続け、自制心の無い人のような後悔の時間は無い。非決意の人は真理からほど遠いのである。

しかし、非決意の人は真理からほど遠いが、そのまま残り続けるのではなく、頹落の離反は起こりうる。頹落は現存在を非本来性へと巻き込む機構であり、否定的なイメージを持たれやすいが、ハイデガー自身は、頹落は「なんら否定的な評価を表明するものではな

<sup>67</sup> プラトン『プロタゴラス』篇, 351b3-357e8. Cf. Plato, *Platonis Opera*, vol. 3, J. Burnet ed., Oxford: Oxford University Press, 1922.

<sup>68</sup> 筆者は現状ではアリストテレスが EN 第 7 巻において論じる知識は Charles の「知識体系」(body of knowledge, 47) に位置付けられているものとしての知識と見る説を支持している。Cf. Charles, D. 2009. "Nicomachean Ethics VII.3: Varieties of akrasia." In C. Natali ed., *Aristotle's Nicomachean Ethics, Book VII: Symposium Aristotelicum (Bk. 7)*, Oxford: Oxford University Press, 41-71.

<sup>69</sup> SZ 223.

<sup>70</sup> SZ 225.

<sup>71</sup> ハイデガーは思慮に時間性(根源的時間)を見出している。ハイデガーは GA24 においてアリストテレス『自然学』の時間論の考察を行い、アリストテレスの時間観念を「通俗的な学以前の時理解」(GA24: 362, 邦訳 372 頁)と表現する。そして、アリストテレスの「時の解釈の着手」(ebd.)には「今の継起」(GA24: 362, 邦訳 371 頁)の性格づけが見られ、根源的時間への発展の萌芽がありながらも「アリストテレスと彼以降の伝統全体が時を性格づける仕方を見る限り、事態はそうなっていない」(GA24: 369, 邦訳 379 頁)という。一方で、EN 第 6 巻の思慮であれば、その具体的解釈においてカイロス(kairos)が構成され、限界づけられているとハイデガーは自身の見解を述べる(GA62: 383)。

<sup>72</sup> 「自制心の無い人はすべて後悔する傾向がある」(EN 1150b30-31)。

<sup>73</sup> ハイデガーは、アリストテレス『自然学』第 4 巻第 11 章の「時間とは『より先・より後』という観点における、運動変化の数である」(『自然学』220a24-25, 邦訳 228 頁)という時間の定義に着目し、「時とは次のようなもの、すなわち運動における前と後への注視において、また注視に対して示される数えられたもの、あるいは簡潔に、以前と以後の地平の内で出会われる運動の数えられたものである」(GA24: 333, 邦訳 341 頁)と解釈する。

<sup>74</sup> SZ 339.

<sup>75</sup> ebd.

くて、現存在がさしあたってたいていは、配慮された『世界』のもとにたずさわっているということにはかならない<sup>76</sup>といい、気遣いと密接な関係を示唆する。これは、ハイデガーが「頽落しつつ開示され<sup>77</sup>ると述べるように、頽落が気遣い<sup>78</sup>と表裏一体のものを意味する。気遣いの構造に開示態は含まれるが、決意性が「開示態の際立った様態」<sup>79</sup>である一方で、非決意性における開示態は、世間話、好奇心、曖昧さによって「歪められ閉ざされ<sup>80</sup>た「開示態の欠如態」<sup>81</sup>である。欠如といっても、その中に歪められ隠された真理はある。しかし、そうした真理もまた、真理のあり方の一つであり、現存在の非本来的な気遣いは、僅かながら真理を開いているといえる。つまり、非決意性という現象は、ハイデガーが追究する真理に関して、決意性の真理現象の反対概念のいわば非-真理現象 (Un-wahrheitsphänomen)、つまり真理の隠蔽現象ということができる。

さらに、ハイデガーは「現存在はこれまですでに非決意性のうちに (in der Unentschlossenheit) 居たし、そしておそらくはやがて非決意性にかえるであろう」<sup>82</sup>と、現存在の恒常的に在る「場」<sup>83</sup>として非決意性を表現する<sup>84</sup>。しかし、そうしたくつろぎの場は逃亡の場でしかなく<sup>85</sup>、「その都度の現事実的な可能性を開示しつつ企投し規定する」<sup>86</sup>場である決意性において、真理は限なくあらわになる。それゆえに、決意性が「実存論的かつ存在論的には、いっそう根源的な現象」<sup>87</sup>たりうるのであるが、ここまで論じたように、非決意性もまた隠蔽されつつ真理を保ち続け、本来的な真理現象への可能性をつねに持つ、非本来的な真理現象なのである。

以上、アリストテレスの EN 第 7 巻の自制心の無さを参照しながら、ハイデガーの非決意性について検討した。本節までの検討により、非決意性もまた真理において描かれる現象であること、それゆえに決意性・非決意性ともに第一に真理を対象とした現象であることが考察された。

## 4 終わりに

決意性・非決意性において問題にされているのは真理であり、非決意性における曖昧な

<sup>76</sup> SZ 175.

<sup>77</sup> SZ 181.

<sup>78</sup> 「気遣いの構造は、その内に、現存在の開示態を秘めている」 (SZ 220) と、気遣いの構造のうちに開示態があることは触れられている。

<sup>79</sup> SZ 297.

<sup>80</sup> SZ 222.

<sup>81</sup> SZ 185.

<sup>82</sup> SZ 299.

<sup>83</sup> この捉え方はハイデガーにおける "ethos" という語のその後の展開、すなわち「存在者全体のただなかで人間が『住まうこと』 (>das Wohnen< des Menschen inmitten des Seienden im Ganzen)」「人間の滞在 (Aufenthalt des Menschen)」（GA55: 206）という解釈にもつながる。アリストテレス解釈においては、ハイデガーは "ethos" を「姿勢 (Haltung)」（GA18: 68）、「人間の存在 (Sein des Menschen)」（GA19: 131）、「人間のあり方 (menschliche Seinsart)」（GA22: 231）と理解している。

<sup>84</sup> 非決意性の「場」としての表現は、他に SZ 308, 390 において見られる。

<sup>85</sup> SZ 189.

<sup>86</sup> SZ 298.

<sup>87</sup> ebd.

知もやはり真理の一つのあり方であるといえる。ナトルプ報告において、「ついでこの存在論的な地平の中に『[ニコマコス] 倫理学』を置くことによって、同書が人間存在、人間の生、生という動性をもった存在者の解明であるのが明らかにされる」(〔〕内は訳者による補足)<sup>88</sup>と、『形而上学』に続いて EN を研究する構想であったことが明かされている。「生という動性 (Lebensbewegtheit)」という語だけでは断定できないが、EN における性格の分析は、後悔という機会を契機とする人間の可塑性も含めた議論であることを考慮に入れると、ハイデガーがその点を理解して構想を練ったと考えることは可能である。本稿では、EN と SZ を構造的に近づけようと試みた。ハイデガーの独自の読み込みと、他の影響がある点で、完全には同じにできないうえ、その中には議論の差異や飛躍はあるが、それにも関わらず、アリストテレスとハイデガーに構造的な類似点を見出す可能性はあった。ただし、決意性・非決意性ともにアリストテレスとの関連の記述を急ぐあまり、説明すべきであると考えるながら見逃した事項も多い。考察が不十分な点は今後の課題としたい。

## 文献表

### 一次文献

- Aristotle, *Ethica Nicomachea*. I. Bywater ed., Oxford: Oxford University Press, 1894. [= EN]  
—, *Physica*. D. Ross ed., Oxford: Oxford University Press, 1951.  
Heidegger, M. *Sein und Zeit*. 17. Aufl., Tübingen: Max Niemeyer, 1993. [= SZ]  
—, *Grundbegriffe der aristotelischen Philosophie*. Gesamtausgabe Bd. 18, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2002. [= GA18]  
—, *Platon: Sophistes*. Gesamtausgabe Bd. 19, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1992. [= GA19]  
—, *Grundbegriffe der antiken Philosophie*. Gesamtausgabe Bd. 22, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2004. [= GA22]  
—, *Die Grundprobleme der Phänomenologie*. Gesamtausgabe Bd. 24, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1997. [= GA24]  
—, *Heraklit. 1. Der Anfang des abendländischen Denkens/ 2. Logik. Heraklits Lehre vom Logos*. Gesamtausgabe Bd. 55, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1994. [= GA55]  
—, *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles. Einführung in die phänomenologische Forschung*. Gesamtausgabe Bd. 61, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1994. [= GA61]  
—, *Phänomenologische Interpretation ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zu Ontologie und Logik*. Gesamtausgabe Bd. 62, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2005. [= GA62]

### 邦訳

- アリストテレス, 『ニコマコス倫理学』加藤信朗訳, (旧版)アリストテレス全集 第13巻, 岩波書店, 1973.

---

<sup>88</sup> GA62: 397, 邦訳 95 頁.

- 、『ニコマコス倫理学』朴一功訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、2002.
- 、『ニコマコス倫理学』神崎繁訳、（新版）アリストテレス全集 第15巻、岩波書店、2014.
- 、『ニコマコス倫理学』上巻、渡辺邦夫、立花幸司訳、光文社古典新訳文庫、光文社、2015.
- 、『ニコマコス倫理学』下巻、渡辺邦夫、立花幸司訳、光文社古典新訳文庫、光文社、2016.
- 、『自然学』内山勝利訳、（新版）アリストテレス全集 第4巻、岩波書店、2017.
- M・ハイデガー、『存在と時間』原佑、渡邊二郎訳、世界の名著 62 ハイデガー、中央公論社、1971.
- 、『存在と時間』上巻、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1994.
- 、『存在と時間』下巻、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、1994.
- 、『存在と時間』高田珠樹訳、作品社、2013.
- 、『古代哲学の根本諸概念』左近寺祥子訳、ハイデッガー全集第22巻、創文社、1999.
- 、『現象学の根本諸概念』溝口兢一、松本長彦、杉野祥一訳、ハイデッガー全集第24巻、創文社、2001.
- 、『アリストテレスの現象学的解釈 ——現象学的研究入門』門脇俊介訳、ハイデッガー全集第61巻、創文社、2009.
- 、『アリストテレスの現象学的解釈 ——『存在と時間』への道』高田珠樹訳、平凡社、2008. [= GA62の邦訳として参照]